

男子バレーボール部

本橋 新一郎

医学部男子バレーボール部

千葉大学医学部135周年記念誌発刊にあたり、いつの時代でも目標としていた東日本医科学生総合体育大会（東医体）の結果を中心に医学部男子バレーボール部の歴史を振り返ることとする。

昭和55年は主将・江石を中心として、主管校として駒沢体育館で行われた東医体に臨んだ。前年に高山を中心としたチームで東医体準優勝を果たし、ほぼ同じチーム構成のまま臨んだ大会であり、優勝を目指したチーム作りをしていた。しかしながら、準決勝で岩手医大に破れ、3位決定戦で新潟大に勝利し3位に終わる。金沢大学において開催された全医体に出場では決勝まで勝ち上がり、そこでも再度新潟大を退け優勝した。東医体に比べると、どのチームもいまひとつのでき上がりであったものの、とりあえず優勝を飾ることができ、チームとしては一定の満足を得た。

昭和56年は、主将・景山を軸に都内で行われた東医体に臨んだ。高山の卒業、江石の引退などもあったものの、景山、相川、井合ら5年生が充実し、戦力としては決して前年に大きく劣るものではなかったものの準々決勝で敗れた。

昭和57年は、当初坂口を軸にチーム作りに励んだが、諸般の事情により、当時一学年下だった藤原に学年途中で主将を交代した。藤原は強いリーダーシップを発揮し、当時6年生であった景山と相川を軸としたチームをまとめ上げた。仙台で開かれた東医体では、55年よりはチーム力は劣っていたものの、まとまりのよさで準決勝まで勝ち上がった。準決勝では筑波大に破れ、さらに3位決定戦で自治医大に破れ4位に終わった。最後は息切れした感もあったが、チーム力以上のものを発揮したという達成感があった。

昭和58年は、藤原の同学年の興村が主将を務めた。景山、相川が卒業し大幅なメンバーの入れ替えもあり、戦力は大きくダウンした。セッターの興村を軸に、滝澤、古関が主に攻撃するチームだったが、ミスも多く江東区で開かれた東医体では、準々決勝で敗れ去った。この時の打ち上げは随分荒れていたように記憶している。この年度をもって、永年

バレーボール部の顧問をして下さっていた故佐藤博元第二外科学教授が定年退職をされ、故山口豊肺外科元教授が、バレーボール部の顧問を快く引き受けて下さり、定年退職されるまで顧問として務めてくださった。

昭和59年は、古関が主将を務め、前年興村が作り上げたチームに、新入生であった佐藤悟郎、松本らを加えてチームを作った。選手層が厚くなった分、チーム力は充実したものの、やはり1年生を2名加えたため準備不足も否めず、神奈川大学体育館で開催された東医体では、準々決勝では本来のチーム力以上のものは発揮できず信州大学に敗れた。

昭和60年は、昭和56年入学の部員がいなかったこともあり、57年入学の池田智昭が一年前倒して主将を務めた。小松、佐藤、松本を軸に、6年生の古関を加えて、栃木県で開催された東医体に臨んだ。この大会は、日光に近い修学旅行宿のようなところに宿を取り、リラックスしたムードで大会を迎えた。試合の方は、決勝トーナメントの一試合目に横浜市大に敗れ、早々に試合会場を後にしたが、この試合には山口豊教授がたいへんなご多忙の中を駆けつけて下さり、ベンチに入っただけの応援を頂いた。顧問の先生の公式戦へのご臨席は初めてのことで選手一同、たいへん励まされたが、勝利という形で試合を終われなかったのが残念だった。この大会は、試合に勝つというよりは終始和気あいあいとした雰囲気だったのが印象的だった。

昭和61年には池田の同学年の小松に主将が交代となり、新たに池田雄次、藤田を加えて栃木で行われた東医体に臨んだ。残念ながら決勝リーグ1回戦にて信州大に敗戦した。

昭和62年は田中が主将を務め、新人に本橋を加えた。東海大学で開催された東医体では、レギュラーの一人であった市川千秋の予選での怪我があったものの、全員でその穴を埋め合う働きを見せ、準々決勝まで駒を進めたが、北海道大学に敗れベスト8に終わった。

昭和63年は小松、池田、伊野、市川智章、斉藤の5人が卒業したが、笠川、丸田、深見など5人の新人を加えた。主将を務めた佐藤や松本、小林ら5年生を軸としたまとまりのあるチームが出来、春の関

第5章 交友の広がり

東医科大会で優勝した。その勢いも駆って出場した筑波での東医体は、準々決勝で旭川医大に善戦したものの、僅差で敗れた。

平成元年は主将・市川のもと、田中、長村が卒業し、阿部を加えた。チームとしては主力が大きく入れ替わったこともあり、新潟大学で開催された東医体では旭川医大に敗れベスト16で終わった。

平成2年は池田が主将を務め、佐藤、松本、小林、永山が卒業し、赤松、石田を加えた。チームとしての総合力は良く、前年の秋の1部リーグで優勝、春の関東医科大会では準優勝し東医体への期待が高まっていたが、北海道で開催された東医体では、準々決勝で山梨医大に敗れ最終日に残れずベスト8で終わった。

平成3年は本橋が主将を務め、市川、三河、矢野が卒業し、安井を加えた。この年から春の合宿を他校と合同で行うようになり、互いに切磋琢磨すると同時に親交の和が広がった。神奈川で開催された東医体では、準々決勝で群馬大に勝利し、久しぶりに最終日に駒を進めた。準決勝で昭和大学に敗れたものの、後日昭和大学の不正による失格があり、3位のメダルを自分たちで作製した。また旭川で行われた全医体にも出場し、他校との交流に主眼を置く全医体の雰囲気を楽しむことができた。

平成4年は笠川主将のもと、長らくレギュラーセッターであった池田と藤田が卒業し、橋場を加えた。チームの中心であった池田、藤田の二人が抜けたことでチームの熟成が進まず、神奈川で開催された東医体では、決勝トーナメントの1試合目に敗れベスト16で終わった。

平成5年は阿部が主将を務めた。本橋が卒業し、小笠原、清水が新たに加わった。佐倉で行われた東医体では残念ながら予選リーグ敗退となった。

平成6年には赤松が主将を務めた。笠川、丸田の2名が卒業したが、新入生として秋元・小林豊・土地・中田・星野の5名が入部し、新たなチームの軸となる一歩目を踏み出した。札幌で開催された東医体では決勝トーナメント1回戦で山形大に敗れてベスト16となった。

平成7年には安井主将のもと、阿部・深見が卒業し、岩田が新たに加わった。深見の卒業によりセッターを安井へ変更し、赤松・中田・小林を中心とした攻撃力・守備力ともにバランスのとれたチームを作っていた。盛岡で行われた東医体では準決勝で慈恵医大と対戦中に主将・セッターの安井が相手チームの反則により負傷、セッター変更というアクシデントに見舞われて敗北したが、3位決定戦では

札幌医大と対戦し、安井が怪我を押して出場し、見事3位となった。

平成8年には小笠原が主将を務めた。石田・赤松が卒業し、万代が新たに加わった。前年と比較し全体的なチーム力としては大きく変わらずにチームを作っていたが、東医体直前に主将小笠原がまさかの負傷で、急遽レフトの小林をセンターに、レフトには岩田が入れたが準備不足は否めず、準決勝で北海道大学に敗れ、3位決定戦では群馬大に敗北し4位となった。またこの年の春から女子バレー部が正式に発足し、それまでの同好会から部としての活動がスタートした。

平成9年には中田が主将を務めた。安井が卒業し、神谷・鈴木英一郎・塩浜・田村・土屋の5名が新たに加わった。昨年からメンバー変更なくチームを組め、また主将中田の綿密な計画に基づき練習を重ね熟成されたチームが完成した。宇都宮で行われた東医体では、準決勝で王者信州大学と対戦しフルセットで敗北、3位決定戦では山形大に勝利し、3位という結果で終わった。この年山口豊肺外科教授が、定年退職されるにあたり、新たに齋藤康第二内科教授（当時、現千葉大学学長）が顧問を引き受けてくださった。

平成10年には、岩田が主将を務めた。卒業生はならず、小泉・佐藤文紀・杉山・高橋・塚本の5名が新たに加わった。2年間で部員が倍以上になり、試合中ベンチ内に入れないものも出てくるようになり、チーム作りということだけでなく、バレー部として一回り大きな懐を要求されることとなった。川崎で行われた東医体では、準々決勝で慶応大と死闘を尽くし、フルセットで勝利し最終日へと駒を進めた。しかしその疲れもあって準決勝では群馬大に敗れてしまったものの、3位決定戦では山形大に勝利した。

平成11年には万代が主将を務めた。小笠原・清水・橋場が卒業し、石渡・西村・渡辺が新たに加わった。対戦前に敵のデータを徹底的に集計・分析し対策を練るデータ班が活躍し、レギュラー以外もベンチ内外から積極的に試合に参加する体制が出来上がった。駒沢で行われた東医体では、決勝戦で主管校であった慈恵医大と対戦した。まさにアウェイでの対戦のような不運な判定にも苦しみられて敗北し、2位という結果で終わった。

平成12年には田村が主将を務めた。石井、岡田・藤野・薛が新たに加わったが、チームの中心であった秋元・小林・土地・中田・星野が卒業したことで、これまでの「勝つためのバレー」ではな

く、「バレーを楽しみつつ勝つ」という方向へ大きく転換する年となる。秋田で行われた東医体では決勝トーナメント1回戦で旭川医大に敗北、ベスト16となったものの、優勝した旭川医大から最も点を取ったチームとして、大きな自信となった。

平成13年には佐藤文紀が主将を務めた。岩田が卒業し、鈴木悟志、鈴木広和が新たに加わった。レフトに杉山が加入した以外は同じメンバーでのチームとなった。レギュラー・ベンチ・応援席のそれぞれの力が相乗効果を生むことのできるチームを作り、「楽しみながら勝つ」という方向性の集大成を築きあげた。新潟で行われた東医体では、準決勝で慈恵医大に敗れ、3位決定戦で山形大に敗れ4位という結果となったが、選手・マネージャー・応援の全員が満足する素晴らしい試合ができた。

平成14年には西村が主将を務めた。万代が卒業し、木村、西宮、畑が新たに加わった。レギュラーの3人が変更するという大きな変化はあったが、翌年へ向けて着実に実力をつけていった。駒沢で行われた東医体では、準々決勝で札幌医大に敗北し、ベスト8という結果になった。

平成15年には藤野が主将を務めた。神谷、塩浜、鈴木英一郎、土屋が卒業し、芳賀、小林和史が新たに加わった。チームとしてメンバーは全く変えることなく昨年度のチームを熟成させることができた。川崎で行われた東医体では、準決勝で札幌医大に敗れ、3位決定戦では北海道大学に勝利し、3位となった。

最近6年間に限っては紙面の都合上（筆者の力不足のため）、東医体の成績のみを記載する。平成16年ベスト16、平成17年ベスト16、平成18年ベスト16、平成19年予選敗退、平成20年予選敗退、平成21年ベスト16。今後現役部員のより一層の奮起を願うばかりである。

現在の千葉大学医学部男子バレーボール部は、平成20年4月に齋藤康先生の千葉大学学長就任による部長勇退に伴い、細胞分子医学講座の岩間厚志教授が部長に就任されている。部員14名、マネージャー6名の計20名で安田主将のもと、月曜火曜に亥鼻体育館で、木曜に西千葉体育館で練習している。試合の最重点は昔と変わらず東医体で、その他の大会として、春季・秋季四校戦（日本医科大学、東京医科大学、日本大学医学部との交流戦）、春季・秋季関東医科リーグ、春季・秋季医歯薬リーグ、新人戦などがある。また、最近では3月には筑波大学医学部男子バレーボール部との2泊3日の合同合宿を行い、他校との交流を深めている。男女バレー部合同の新歓コンパ、納会、追コンなどの連絡が毎年届いている先生方も多いかと思うが、これを機会に現役部員の活躍ぶりを見に行かれてはいかがであろうか。

部員数はベンチに入りきれないほど多いときも、控えがベンチにほとんどいないほど少ないときもあったが、縦横のつながりは今も昔も変わらず良好であるということが、本原稿を記載しての実感である。バレーをすることだけにとどまらず、心から信頼し合える友ができる場として、これからも末永くバレー部の活動が継続されることを願ってやまない。

最後に、この原稿を作成するにあたり、昭和61年卒の古関先生、平成13年卒の岩田先生を初めとする多くの先輩後輩や現役部員に多大なご協力を頂いた。ここに深く感謝の意を表する。また今回は記載出来なかったが、いつの時代も部員を支えて下さった多くのマネージャーの方々にもこの場を借りて感謝申し上げます。

（もとはし しんいちろう）